

動詞「はしる」の3系列の意味とスキニングの3つのタイプ

Les trois séries de sens du verbe japonais *hashiru* et les trois types de “parcours”

芦野文武
Fumitake ASHINO

伊藤達也
Tatsuya ITO

1. はじめに

本論は日本語の動詞「はしる¹⁾」を、発話意味論 (*sémantique énonciative*) の立場から分析し、その3つの意味系列を、「はしる」の意味的ポテンシャルとして同定可能な「スキニング」の3つのタイプとの関係で説明する。

ここで言う発話意味論とは、語彙の意味を、文脈を離れた辞書的意味 (*signifié lexical*) や、外的世界に存在する指示対象 (*réfèrent*) との関係からではなく、もっぱら言語活動に内在する形式的プロセスの中で、複雑ではあるが計算 (予測) 可能な形で構築される対象とみなす立場を指す²⁾。それゆえに、いかなる語彙も、それが含まれる発話の外では意味を構築しえず、毎回の発話 (*énonciation*) こそが、意味構築の源泉であると措定するものである。根本的に我々は語彙の意味は発話における語彙とその周辺の語彙要素 (*co-texte*) との相互作用を通じてゲシュタルトとして構築されると考え、語彙の意味は、当該の語彙のどのような具体的意味にも対応しない意味の潜在性 (ポテンシャル) である抽象的図式と、そこに内在するパラメタに内容を与える周辺要素とが、言表構築のプロセス—述定操作 (*prédication*) や各種の限定操作 (*determinations*) からなる—において複雑に関係付けられることによって生み出されると考える。逆に言えば、このようなプロセスを離れ、メ

タ言語的操作によって切り取られることで文脈を喪失した語彙は、恣意的に周辺環境を補填された「辞書的意味」しか持たない³。

具体的には、本論が扱う「はしる」の「辞書的意味」としては、しばしば「足を使った高速での移動」がその「第一義」と記述されるが、「企業がリストラにはしる」では移動の意味は観察出来ず、むしろ「安易な方法として実行する」という意味が出現する。本論は、一方が動詞「はしる」の本来的な使用、他方がその比喩的（あるいは派生的）な使用であるとする見地（しばしば認知言語学的アプローチもこの見地を採用している）とは異なり、「マラソンをはしる」も「金儲けにはしる」も、同じ「はしる」の異なる環境での特殊な実現とみなし、それぞれの「はしる」の意味が異なるのは、異なる発話の中で異なる周辺語彙と組み合わせられることで、「はしる」の意味のポテンシャルにそれぞれ異なる入力がされているという仮説を立て、そのメカニズムを記述しようと試みる。

本論はまず先行研究の調査（2.1）と辞書類による「はしる」の記述（2.2）をもとに「はしる」の多様な意味を概観した後、「はしる」の統一的仮説として、parcours（スキヤニング）という心的操作を挙げ（3.1）、この3つのパターンとの関係で「はしる」が構築する3系統の意味を分類する（4.1, 4.2, 4.3）。

2. 先行研究

2.1 認知言語学に基づいた先行研究

松本（1997）、湯本（2006）、遠藤（2019）らの研究では「走る」を「歩く」「行く」と同様に「移動動詞」としてその意味と使用に関わる制限を比較している。

本論では「はしる」を必ずしも「移動動詞」とはあらかじめ限定せず、「はしる」に関係づけられる名詞およびそれを「はしる」に関係づける助詞の違いから、多様な意味が構築されているという考えを採用する。確かに経験的には「はしる」が「移動」に関係付けられる用法もあるが、我々の考えでは、それは移動手段を備えた主体がこの動詞に主語として関係づけられた時に生じる意味の1ケースに過ぎず、そうでない主体、例えば「山脈」や「痛み」が

主語となった場合には、物理的な主体の移動よりも、対象を見る視線の移動によって現れる線状の軌跡や、知覚可能な現象の出現の一瞬性に焦点が当たることでもあるのである。また「金策にはしる」で重要なのは金策を順繰りに実行していくことであり、必ずしも「移動」は観察できない。我々はこのような「はしる」の非移動の用例を決して周縁的なものとは考えず、多様な用例のうちの一つとして「移動」の用例と同列に扱うが、先行研究ではあらかじめプロトタイプ的な用法を同定し、そこからの派生した意味として記述している。

先行研究中でも、「亀裂がはしる」という例を説明する際に遠藤（2019: 40）は、「言語主体が対象物の動きに目を向けて追うときのプロセスを本稿では走査 scanning と考え、心的走査 mental scanning は、線状のものを想定して心の中の目で追うプロセスを指すこととする。」と、「走査（scanning）」という言葉を用いている。しかし遠藤（2019）はこれを「はしる」の「抽象的具象物（現象）の主観的移动」を表す一用法の記述とするのみであり、「移動」こそが「はしる」のプロトタイプであるという立場を維持している。本論ではむしろこの scanning を「はしる」の根本的な機能であると考え（3.1）、scanning の元となっている G. Frege の Wertverlauf（値域）及びそれを言語学に応用した A. Culioli の parcours（走査、スキニング）を援用しつつ、「はしる」の根本的機能の特徴づけることにする。

2.2 辞書類による「はしる」の意味の分類

現代語における意味を網羅的に記載していると思われる『明鏡国語辞典』（北原保雄編、大修館）は「はしる」（走る、趨る、奔る）の意味を14に分類している⁴。ここでやや煩雑になるが、例を簡潔にしながらかこの14に分類されている意味を概観することにする⁵。

- (1) 人や動物が足を交互にすばやく動かして移動する。「ランナーが全速力で——」「チーターが草原を——」「廊下を——ってはいけない」
- (2) 乗り物などが進む。また、運行する。「電車が郊外を——」「ここのバスは

十二時を超えても——っている」

(3) 目的の場所へ、急いで行く。急行する。急ぐ。「取るものもとりにあえず事故現場へ——」

(4) 目的達成のために急いで行動する。特に安易な手段での解決を急ぐ。「ドル買いに——」「売り上げ減となるとすぐさま値上げに——」

(5) ある目的のために忙しく動き回る。東奔西走する。駆けずり回る。飛び回る。「金策に——」

(6) (急いで) 逃げ去る。また、逃げてある側につく。「味方を裏切って敵方に——」

(7) 水などが勢いよく流れ出る。また、水などが飛び散る。ほとばしる。「岩場を清水が——」「傷口から血が——」

(8) すべり出る。「刀が鞘から——」

(9) 投げた球がスピードに乗る。「今日はボールがよく——っている」

(10) 文字・文章などが思い通りに書ける。「すらすらとペンは——」「筆が——り過ぎて筆架事件を起こす」

(11) ある方向や状況に強く傾く。「悪の道（流行、極端、私利私欲）に——」

(12) ある方向に通じている。また、細長く延びる。「南北に国道が——」「東西に山脈が——」「道路に亀裂が——」

(13) 光・音などが瞬間的に現れて消える。「夜空に稲妻が——」「閃光が——」

(14) ある感覚・感情などが瞬間的に現れて消える。「肩に痛みが——」「声を聞いただけで虫酸が——」

本論はここに列挙された14種類の意味から出発するが、「はしる」の意味が14個に限られると考えているわけではない。例えば『大辞林』では古語も含め12の意味を立てていることからわかるように、「はしる」の個々の意味は合理的、離散的に数え上げられるものではなく、むしろ個々の意味が連続的なヴァリエーションを構成していると見るべきであり、それらに区別を持ち込むのは多かれ少なかれ恣意的である。本論の関心は、むしろどのようにこのような意味のヴァリエーションが生み出されるのか、そのメカニズム

を記述することにある。

本論の仮説では、「はしる」の意味的ヴァリエーションには、主として3系統（タイプA、タイプB、タイプC）に区別され、さらにタイプAに3種、タイプCに2種の区別が加えられる。これは「はしる」に3種の意味がある、あるいは6種の意味があるという主張ではなく、3つのタイプは3.1で述べる「はしる」の統一的仮説、スキニングの3つのタイプに対応し、さらにスキニングの際に導入されるクラスの性質、クラスを構成する要素の性質に関係して区別できるということを意味する。つまり同じ系統であれば、個々の意味が異なるにせよ、同じようなプロセスに基づき意味の構築がなされているとみなせるという主張である。

3. 「はしる」の統一的仮説

3.1 「はしる」の仮説

「はしる」の多様な意味の中に存在する統一的な心的オペレーションは、「はしる」の意味的ポテンシャルであり、どのような個別的な意味にも対応しないが、あらゆる個別的な意味の川上に存在していると考えられる。本論では「はしる」の仮説を次のように提案する：

「はしる」の仮説：「はしる」はクラスKの内部要素 $[k_1, k_2, k_3 \cdots k_n]$ の *parcours*（スキニング）をマークする。

ここで言うスキニングとは、あるクラスKが与えられ、その中のすべての内部要素 $[k_1, k_2, k_3 \cdots k_n]$ を一つ一つ検討していく心的操作のことある⁶。動詞「はしる」の個々の意味は、言表内に現れる名詞が助詞を通じて「はしる」と関係づけられ、この定義の中のパラメタ値を埋めていくことで構築される。したがって「はしる」の意味の多様性は、パラメタ値が言表内に共起する名詞および助詞によって多様に付与されるという発話プロセスの結果として生じると考えられる。

4. スキャニングの3つのタイプ

スキャニングはいずれの場合も、上の定義のように、クラスKの構築、その内部要素 $[k_1, k_2, k_3 \cdots k_n]$ の走査を含むが、以下3つのタイプの分類は、タイプAではクラス内の均質な要素間の停止のない移動（＝滑らかな面の走査）、タイプBではクラス内の不均質な諸要素の検討（＝粗い面の走査）、タイプCではクラス内の排他的な極性を持つ2要素のうちの一つの選択による走査の中断という特徴の違いに基準を置いている。それぞれの持つ特徴から、タイプAを「移動」、タイプBを「模索」、タイプCを「逸脱」と区別することにする。また例文は主として2.2の『明鏡』の例を再録しつつ、我々の分類の例示としているが、説明の便宜のために作例、検索例も加えている。

4.1 タイプA「移動」

このタイプのスキャニングは、主体（ヒト、モノ、あるいは知覚の対象）の、クラスKの中のある地点から別の地点への「移動」によって特徴付けられる。この「移動」の価値の中にも、移動の「高速性」（4.1.1）、「滑らかさ」（4.1.2）、「線状性」（4.1.3）によってさらに下位区分を設けることができる。

4.1.1 「高速性」

このタイプの例では移動の「高速性」に焦点が当てられるが、この「高速性」が生じる理由は、移動が行われる2点そしてその間に存在する無数の点（それらすべてはクラスKの要素 $[k_1, k_2, k_3 \cdots k_n]$ である）のいずれもが均質であるために、抵抗を生じさせるものがなく、滑らかで均質な点の集合の上を走査することになるからである。以下例を見ながら何がクラスであり何が要素なのかを確認してみる。

- (1) ランナーが全速力ではしる。（『明鏡』例（1））
- (2) 廊下をはしってはいけない。（『明鏡』例（1））
- (3) チーターが草原をはしる。（『明鏡』例（1））
- (4) 電車が郊外をはしる。（『明鏡』例（2））

(5) ここのバスは12時を超えてもはしっている。(『明鏡』例(2))

(6) 取るものもとりあえず事故現場へはしる。(『明鏡』例(3))

クラスKは(2)「廊下をはしてはいけない」では「廊下」、(3)「チーターが草原をはしる」の「草原」にあたり、その要素 $[k_1 \cdots k_n]$ とは「廊下」や「草原」の上の無数の地点の集合である。(1)「ランナーが全速力ではしる」では、クラスは直接的には語彙によって出現していないが、「はしる」ための場所が前提とされていることから、「はしる」活動が展開される空間がクラスとして存在し、その空間上に存在する無数の地点が要素 $[k_1 \cdots k_n]$ として現れていると考えられる。このように導入されたクラスK(いずれも限定された空間)の中のある地点(要素 k_1)から $k_2, k_3 \cdots$ を経て、他の地点(要素 k_n)まで均質な地点上を「停止なく」走査が行われるため、結果として、移動の「高速性」が共通の特徴として現れる。

この「はしる」の高速性は、しばしば類義語とされる動詞「かける」が「力」を用いる事で実現しているのに対し、走査が行使される表面の均質性、別の言葉で言えば抵抗のなさによって作られている⁷⁾。

(4)「電車が郊外をはしる」の「郊外」もクラスKを導入している。その要素は「郊外」という限定された空間の中に無数に存在する均質な地点の集合(線路)である。(5)「ここのバスは12時を超えてもはしっている」では、語彙的にはクラスKを導入するものではないが、バスには路線や運行範囲が前提とされており、その運行の範囲がクラスKを構成し、バスが運行する地点の集合、路線や駅がその要素をなしている。このように構成されたクラスの中の均質化された地点(線路や路線)を電車やバスという乗り物(明示されなくても、起点や終点を持つことが明らかである)が、「止まらずに」移動、すなわち「運行」することがここでは「はしる」ということの意味である。なお(4)(5)では「高速性」と同時に、とりわけ(5)では「止まらずに」運行していることに焦点が当たっているように思われる。これは(5)において「はしる」が進行形に置かれていることとも関係していると思われる⁸⁾。

(6)の「事故現場へはしる」では「事故現場」が終点 k_n として明示され、

起点は語彙的には示されないが、走り始めた地点が存在することが前提とされている。この2点はいずれもクラスKの要素となる2地点であるが、この間にも無数に地点は存在し、それらすべてが均質で移動に際し抵抗を生じさせない、このことによって移動の高速性という意味が作られている。

助詞に着目すると、このタイプでは総じて「はしる」の主語として、移動可能性を持つ主体（ヒトあるいはモノ）が助詞「は」「が」によって、および助詞「に」、「へ」によって移動の着点がマークされている。他方、移動の場所（クラスK）は助詞「を」によってマークされることが多い。

ちなみに（1）「ランナーが全速力ではしる」では「全速力」という名詞が助詞「で」によって「はしる」と結びつけられるが、これは「はしる」の様態を定義している。他にも「裸足で」「片足で」「ハイヒールで」「超低速で」「後ろ向きで」など様々な名詞が「で」によって「はしる」と関係付けられ、いずれも「はしる」がどのような様態で実現するかという実現の様態を定義する名詞が「で」を通じて動詞と結びつけられており⁹、「はしる」の実現の様態を定義するものとして副詞的に機能しているが、「全速力で」は「はしる」の仮説のパラメタへの入力をするのではなく、その外側で「はしる」の様態を定義している語彙要素にすぎない。

4.1.2 「滑らかさ」

このタイプの例では移動の「滑らかさ」に焦点が当てられるが、この「滑らかさ」が生じる理由は、「高速性」と同様に、移動が行われる2点そしてその間に存在する無数の点（それらすべてはクラスKの要素 $[k_1, k_2, k_3 \dots k_n]$ である）が均質であるために、抵抗を生じさせるものがなく、滑らかに走査が行われるからである。

- (7) 岩場を清水がはしる。（『明鏡』例（7））
- (8) 傷口から血がはしる。（『明鏡』例（7））
- (9) 刀が鞘からはしる。（『明鏡』例（8））
- (10) 今日はボールがはしる。（『明鏡』例（9））

(11) すらすらとペンがはしる。(『明鏡』例(10))

(12) 筆がはしり過ぎて筆架事件を起こす。(『明鏡』例(10))

(7)「岩場を清水がはしる」では「岩場」がクラスKを導入し、その上に存在する無数の均質な地点 $[k_1, k_2, k_3 \dots k_n]$ を清水が滑らかに、すなわち「抵抗なく」流れ続けることを表している¹⁰。

(8)「傷口から血がはしる」では「傷口」が「から」を伴い起点(スキニングが開始される地点 k_1)を表している。(7)と違い(8)では直接的にクラスKを導入している語彙要素はないが、血が流れる場所として想定される限定された空間がクラスKを構成し、起点 k_1 はこの中に位置し、均質な無数の点の集合がつくられる。その均質な点の上を「抵抗なく」操作するという、液体の特有の移動の滑らかさをこの例は表している。他の例同様、滑らかさは走査の抵抗のなさによって由来する。ちなみに液体を主語とする、(7)と(8)では、「はしる」は「流れる」と置き換え可能である。

(9)「刀が鞘からはしる」では、ある一定の長さを持つ「鞘」から始まる地点の集合をレールのようにして「刀」が抵抗なくなめらかに滑っていく様子が表わされる。この例も(7)同様、起点 k_1 のみが語彙的に示され、クラスKはこの起点から始まる限定された空間として暗示されているにすぎない。この例では「はしる」は「すべる」とも置き換え可能であり、滑らかなレールの上を刀がすべるように、すなわち「抵抗」なく移動するのである。

(10)の「今日はボールがはしる」においても、ボールの移動する際の「抵抗のなさ」に焦点が置かれ、起点(ボールを投げる人)と着点(ボールを受け取る人)はどちらかといえば背景に退いている(しかし着実に存在している)。この場合「はしる」は高速性とも関係するが、「調子の良さ」「スムーズさ」「抵抗のなさ」とより深く関わる。このような意味は、ボールが投げられる物理的空間(クラスK)に含まれる、起点(k_1)と着点(k_n)の間にある無数の地点の均質性、すなわち抵抗の消滅が生み出している。

(11)「すらすらとペンがはしる」と(12)「筆がはしり過ぎて」も同様で、筆やペンが動く限定され得た空間の中の、地点の要素の均質性、抵抗の消滅

から、停止なく「ペン」や「筆」がなめらかに動くという意味が生まれている。この例では起点から着点への移動、その速さよりも、むしろ「抵抗のなさ」という、スキニングの活動の様態に焦点が置かれているのである。

4.1.3 「線状性」

このタイプの例では、「高速性」や「滑らかさ」よりも、「線状性」に焦点が当たすが、この理由は、これらの例では、空間的に限定されたクラスKの中にある要素 $[k_1, k_2, k_3 \dots k_n]$ の上の走査が線状の軌跡として認識されるからである。その場合「高速性」や、「滑らかさ」も当然存在しているが、むしろ均質な点上の走査が行われたという、線状の軌跡が痕跡として残される。なお以下の例からわかるように、主語自体が線的な軌跡を残す場合もあれば、人間が感覚器官、視覚や触覚を通じて、その認識の対象の中に均質な地点の連続性を認識する場合もある。

- (13) 南北に国道がはしる。(『明鏡』例(12))
- (14) 東西に山脈がはしる。(『明鏡』例(12))
- (15) 道路に亀裂がはしる。(『明鏡』例(12))
- (16) 肩に痛みがはしる。(『明鏡』例(14))
- (17) 声を聞いただけで虫酸がはしる。(『明鏡』例(14))
- (18) 閃光がはしる。(『明鏡』例(13))
- (19) 夜空に稲妻がはしる。(『明鏡』例(13))
- (20) 北海道から沖縄まで日本中を衝撃がはしる。

このタイプの例では、しばしば主語となる名詞は、それ自体としては動くことのできない、非可動物（国道、山脈、亀裂、痛み、稲妻）である。これらは人間の認識の対象として、つまり人の視覚や触覚に訴えることで、あるクラス内に存在する均質な要素をつないで、線的な軌跡を作り出すことになる¹¹。可動物か非可動物かの主語の違いはスキニングが、人や物質の具体的な移動を意味するか、認識対象の移動を意味するかの違いにすぎず、スキヤ

ニングが存在すること自体には変りはない。

例えば(15)の「道路に亀裂がはしる」では「道路」がクラスKを導入し、そこに存在する無数の(同じような性質を持つ)均質的な地点の群れが、亀裂として認識され、その上を人の視線が移動することで、線状の軌跡が現れる。亀裂を構成するのは道路の内部にある要素 $k_1, k_2, k_3 \dots$ という無数の地点であり、その上を視線が走査することが「亀裂がはしる」の意味であり、この場合は「高速性」や「滑らかさ」よりも、「線状性」が際立つ。当然ながら、亀裂自体が移動することはないが、視線の助けを借りて、道路の上に視線の線的な走査が生じるのである。

(14)「東西に山脈がはしる」では空間上に一つ一つの高山(均質な、つまり同じように盛り上がるという性質を持った地点の集合)があり、それを視点がつないでいくことで線状の軌跡ができる。また(13)「南北に国道がはしる」も(14)「東西に山脈がはしる」と全く同じ原理が観察できる。

ちなみに、「山脈がはしる」は言えるが、「*森がはしる」とは言えない(「*青木が原樹海が西から東へはしっている。*太平洋がはしっている。」)のは、視線が向けられる対象である「森」が明らかに線状性を持たないため、「はしる」と言えるためには、認識の対象が、線状性や方向性を持たなければならないことがわかる。したがって「帯状の森がはしる」なら可能となるが、これは形容詞「帯状」が森に線状性を与えているからである。

付言すると(13)(14)の「南北に」、「東西に」は一見、方向性や、線状性を導入しているように思われるが、「山脈」や「国道」など、すでに線状性を要求している名詞を補完するもののように思われる。「この県の北部には山脈がはしる」「町の中央部を国道がはしる」などのように、「山脈」や「国道」は人間の視覚の対象となることで線状性を限定された空間のうちに描き出すので、「南北に」や「東西に」はその線状性を空間内に位置付けしている。「帯状の森」の例が示すように、知覚対象自体が視線を通じて線状性を要求するのである。(17)の「虫酸」は「胃酸」を意味し、それ自体が上昇するに際し、線状の軌跡を人間に感覚させている。

(16)(18)(19)はある感覚によって把握される対象が瞬間的に出現すると

いう解釈が強く、線状性よりも、瞬間性（移動がある場合の「高速性」に相当）の方に焦点が置かれている。(16)「肩に痛みがはしる」とは、肩というクラスに痛みが出現（肩を構成する地点を走査）して消えていくことを表している。この場合スキャンニングは、出現から消滅への移行が、あまりにも短時間であり、瞬間的である。

(19)「稲妻がはしる」は線状性が認められるタイプ、(16)「肩に痛みがはしる」、(18)「閃光がはしる」は「瞬間性」に焦点が当てられるタイプであるが、いずれも、クラス内の走査という特徴は共通している。

助詞に関して言えば、「肩を激痛がはしる」「空に閃光がはしる」も可能であることから、「場所（クラス）は「を」「に」いずれによっても導入可能だと考えられる。

(20)「北海道から沖縄まで日本中を衝撃がはしる」でも、「から」や「まで」に後続されているからといって、「北海道」が起点、「沖縄」が着点という解釈は不自然であろう。この場合のクラスは「日本」であり、このクラスの両端を示すために北海道から沖縄までという表現が用いられている。衝撃はおそらく日本の中心、事件発生の中心、情報発信の中心などを暗に指し、そこからクラス内の全域へ向かってスキャンニングが起こっている。北海道や沖縄はむしろ外縁部分をマークしている。衝撃は日本をそのスキャンニングのクラスとして隅から隅まで走査し、外に出ることによって消えるのである。「から」や「まで」が常に起点や終点を表しているわけではなく、動詞に内在する意味的機能との関係で柔軟に入力されるパラメタの場所が調整されているのである。

以上タイプAの例はいずれも「移動」という性質が観察できた。この「移動」は与えられたクラスの中の均質な点の上を停止なく走査するというスキャンニング特有の性質を持っている。この性質が、組み合わせられる名詞の性質と結びつくことで、「高速性」「滑らかさ」「線状性」という様々な意味を生み出すが、すべての元になっているのはスキャンニングという心的活動である。

4.2 タイプB「模索」

タイプBは、タイプAと同じように、クラスKの中で、次々に要素 $[k_1, k_2 \dots k_n]$ を走査していく特徴があるが、クラスKの中の構成要素は「差異化」されており、不均質である。したがって滑らかには走査は進まず、個別性を持つ個々の要素を一つ一つ不連続に検討していくことに特徴がある。したがって、タイプAで見られた「移動」に伴う「高速性」「滑らかさ」「線状性」は観察されず、ある目的のために個々の方策を次々に検討していくという「模索」の価値が強くなる。

(21) 金策にはしる。(『明鏡』例(5))

(22) A社は最近リストラにはしっているようだ。

(23) 高まる移転価格リスク企業、税務防衛策にはしる。

(24) 公的な年金は頼りにならないと、あの手この手で自衛策にはしる人たち。

(出典：https://www.tbs.co.jp/senkyo2013/preelection/saninsen/20130712_01.html)

(21)の主体は物理的には「はしる(足を使った高速移動)」ことはせずに、Aさんに電話をかけ、Bさんに手紙で金の工面を依頼し、C銀行に赴き、等々の行動を連鎖的に実行している。この意味で(21)「金策にはしる」は「金策にはしりまわる」と置き換えが可能である。ここでは、「金策」を目的とした具体的な金策の手段のクラスKとしてその内部要素 $[金策k_1, 金策k_2, 金策k_3 \dots 金策k_n]$ があり、それ自体不均質な様々な要素の絶え間ない模索が繰り返されるのみである。

タイプBの例は文脈によっては次のタイプCに分類されうる場合もある。例えば(21)も「安易な金策にはしる」などと文脈を補うと、タイプCの「逸脱」の例に解釈されうる。(22)も「リストラ」が、「様々な手段としての会社再建策」ではなく、避けるべきもの、安易なもの、最終的な手段という価値付けを色濃く付与されてしまえば、タイプCに解釈される可能性もある。インターネットの例だが、(23)、(24)などに含まれる「策」という語彙要素

により、その内容に多様性を要求する、つまり不均質な要素を構成するようなクラスを導入している名詞の場合、タイプBに分類される用例となることが多いように思われる。

4.3 タイプC「逸脱」

このタイプも、タイプA、タイプBと同様、スキヤニングが存在し、その前提条件であるクラスKの構築、その中の要素間の走査が行われるという点には変わりがない。しかしタイプCの場合、クラス内の要素が二項対立的であり、タイプAのように無数の要素が均質的、タイプBのように無数の要素が不均質という特徴を持たない。タイプCの場合は、クラスK内で、ある価値と、それとは相容れない価値との選択が強いられているという二者択一的な特殊なスキヤニングが起こっている。

この特異なスキヤニングの結果として、要素kを選択することによって、スキヤニングは打ち切れ、いわばスキヤニングから「出る」ことになってしまう。この要素kはスキヤニングの観点から見ると「出口」として機能し、そこを通じて外に出るということは、クラスKの走査が、たとえ半ばであっても、強制的に終了させられ、走査の対象であったクラスKが放擲されることを意味する。この結果「逃避」や「逸脱」というタイプCに特有の価値が生じてくる。

「逸脱」も一種の「移動」であるために、タイプAの変種と見られがちであるが、オペレーションのレベルでタイプAとタイプCとは異なる様相を呈し、その結果意味的にも異なる価値が生じている。具体例とともにタイプCに特有の走査を見てみることにする。

- (25) 味方を裏切って敵方にははしる。(『明鏡』例(6))
- (26) 悪の道にははしる。(『明鏡』例(11))
- (27) 流行にははしる。(『明鏡』例(11))
- (28) 極端にははしる。(『明鏡』例(11))
- (29) 私利私欲にははしる。(『明鏡』例(11))

これらの例では、いずれも本来いるべき場所を逸脱し、ネガティブな価値へ逃亡することに焦点が置かれている。例の中で、助詞「に」（あるいは助詞「へ」）によって導入されるタームは（25）「敵方」、（26）「悪の道」、（28）「極端」、（29）「私利私欲」などのようにもともとネガティブな価値を持つか、（27）「流行」のように中立的なタームだが、この文脈に限りネガティブに解釈されるかである。

これら例の場合、クラスを導入する単語は明示されないが、（25）であればクラスは「敵」か「味方」かどちらのポジションにつくかという二律背反的な要素のどちらかの選択という形で現れる。また（26）では「正しい道」と「悪の道」、（27）では「保守」と「流行」、（28）では「中庸」と「極端」、（29）では「無私無欲」と「私利私欲」といずれも二項対立的な項目の選択が迫られていることから、二律背反的な要素のどちらかを取ることが、タイプCのクラスであり、内部にはこの二つの要素間だけの検討が起こっているのである。その結果として、いずれの例でも一般的には「悪い」価値を付与された要素が選択され、それにより走査は打ち切れ、このクラス内の走査は終了する。「逃亡」や「逸脱」という価値がこのケースの場合焦点を当てられるのは、スキニング自体が、「悪い」要素を選ぶことで、早々と打ち切れ、活動が放擲されてしまうことから来ている。この例ではしたがってそのような安易な選択により、スキニングを放擲した主体に対する「非難」の意が強く感じられる。

5. 結論

本論は「はしる」の3系列の意味（A「移動」、B「模索」、C「逸脱」）を、スキニングの3つのタイプとの関連で記述した。スキニングのマーカーと同定できる動詞「はしる」は、言表内で種々の名詞と助詞を通じて結びつけられ、内在するパラメタへの値の付与が発話ごとに行われることで、複雑な意味の違いを生じさせている。このように本論では「はしる」の様々な意味間の関係を、プロトタイプの意味からの派生という形で説明するのではなく、全て同一の地平に位置させながら、統一的仮説により説明できるとい

う視点を提示した。

この視点の一般化のためにはさらに多くの動詞の記述、また助詞の機能の同定が不可欠であるが、本論は動詞「はしる」と関連するいくつかの助詞の記述を通じて、そのようなプログラムの一部となることを目指している。

注

- ¹ 「走る」、「疾る」、「奔る」など複数の表記が可能だが、ここでは「はしる」と表記し、いずれの表記での使用をも含むものとする。
- ² 理論的枠組みに関してはcf. Culioli (1990), (1999a), (1999b), (2018)。
- ³ 「辞書の意味」は、諸語彙間の関係を記述する語彙論の対象であり、本論の取り扱う周辺環境に敏感な発話意味論の対象とは区別される。ちなみにF. de Saussureの考えていた *signifié* とは *signifié lexical* を意味すると思われる。
- ⁴ その他の辞書類(『大辞林』『広辞苑』『言海』等)も概ね10以上の多かれ少なかれ類似する意味を「はしる」に関係づけている。
- ⁵ 同じく『明鏡国語辞典』を参照している遠藤(2019)は、この14分類から出発して、独自の分類として8義を与え、人間・動物・乗り物が主語であり、物理的空間を移動するケースを「プロトタイプ」とし、メタファー・メトニミーなどの概念を用いながら、8つの間の意味拡張のプロセスを解明しようとしている。
- ⁶ A. Culioli は、スキヤニングを言語理論の要となる心的操作の一つとして以下のように定義している。「スキヤニングは、ある概念の抽象的な事例のクラスを構築することに関係している。それをクラスKの走査と呼ぼう。Kというクラスを、他の複数の値と区別することを望まずに1つの値で止まることなく走査したり、あるいは他の複数の値と区別ができずに、1つの値において止まることなく走査したりすることになる。ある場合には、(1つの値で)止まることができず、他者に訴えることになるだろう。別の場合には、(ある値で)止まることを望まず、他者に訴えることなく、モダリティを付与することになるだろう。」(Culioli 1985: 70) « La notion de parcours est liée à la construction d'une classe d'occurrences abstraites d'une notion. On parlera de parcours de la classe K. Vous la parcourez sans que vous vouliez ou puissiez vous arrêter à une valeur distinguée parmi les autres valeurs. Dans certains cas, vous ne pouvez pas et vous aurez éventuellement recours à autrui ; dans d'autres, vous ne voulez pas, et vous allez avoir une modalisation sans recours à autrui. » (Culioli 1985: 70)
- ⁷ 森田良行『基礎日本語辞典』も「かける」を「はしる」の類義語としている。
- ⁸ 種々のアスペクトマーカと「はしる」の意味との関係は本稿では扱うことができないため、指摘に止める。体系的考察は別稿に譲りたい。
- ⁹ 芦野・伊藤(2019)は「で」を「媒介」のマーカと定義している。
- ¹⁰ 液体を主語にする例を、他の辞書は古語的用法としている。実際「血がはしる」は現代語では観察されない用法である。「刀が鞘からはしる」も現代語では珍しい。
- ¹¹ まさにこのケースの例に関して、遠藤(2019: 44)は「心的操作 *mental scanning* は線状の

ものを想定して心の中の日で追うプロセスを指す [...]」と書いている。

参考文献

- Culioli, A. (1985): *Notes du séminaire de D.E.A. (1983–1984)*, Université de Poitiers.
- Culioli, A. (1990) (1999a) (1999b) (2018): *Pour une linguistique de l'énonciation*, tome 1–4. Ophrys / Lambert-Lucas.
- Mélis G. (2006): « Peut-on différencier l'opération de parcours ? », *Corela*, HS-4 | 2006, Gournay Lucie & Gérard Mélis (dir.) : <https://journals.openedition.org/corela/1401>
- 芦野文武・伊藤達也 (2019): 「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」、『言語・文化・コミュニケーション』51号、慶應義塾大学日吉紀要、p.105-124.
- 芦野文武・伊藤達也 (2021a): 「現代日本語における「原因」を表す格助詞「で」と「に」の交替と制約」、『人文科学』36号、慶應義塾大学日吉紀要.
- 池上嘉彦 (1993): 「〈移動〉のスキーマと〈行為〉のスキーマー日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察」、『外国語科研究紀要』、東京大学教養学部外国語科 (編)、41 (3)、pp.34-53.
- 遠藤裕子 (2019): 「視覚スキーマと格表示による多義構造図の試案—移動動詞ハシルを事例として—」、『拓殖大学語学研究』、140号、pp.35-59.
- 松本曜 (1997): 「空間移動の言語表現とその拡張」、田中茂範・松本曜 (編): 『空間と移動の表現』、pp.125-230、研究社.
- 湯本久美子 (2006): 「「～に走る」・「～に歩く」のメトニミー構造」、『青山学院女子短期大学紀要』、60号、pp.31-57.

辞書類

- 北原保雄 (編) (2002): 『明鏡国語辞典』第三版、大修館書店.
- 森田良行 (1989): 『基礎日本語辞典』、角川書店.